



## contents

### 巻頭言

「わからないこと」を教えて!

### 授業紹介

創造行為総論

スポーツ実習Ⅱ (サッカー)

旅と旅行記とアジア (ポケットゼミ)

進化とは何か (ポケットゼミ)

食の未来戦略を考える (ポケットゼミ)

### サークル紹介

Digi\*Photo! / ギタークラブ

### メッセージ

新入生へのメッセージ

### KULASISのお知らせ

ログインについて

第2期全学展開がスタートします

### コラム

老いも若きも学術的教養!?

Vol.12

「わからないこと」を教えて!

副学長 西村 周三



京都大学が掲げる基本理念には、研究面では「世界的に卓越した知の創造を行う」こと、また教育面では「卓越した知の継承と創造的精神の涵養につとめる」ことがうたわれています。どちらも高邁な理念です。しかし私は常々、大学のもう一つの大切な使命は、「何がわかっていないのか」を学生たちに知らせることではないかと思っています。大学は知を蓄積している場所なのだから、それを学ぶ人たちに知らせることは当然ですが、同時に研究者たちは、とくに謙虚になって、どういうことがわからないのか、懸命に知ろうとしてもなかなかわからないことが何なのかを、学生に伝えることに意を払って欲しいと思います。

分野にもよりますが、初年次の学生や若い学生諸君は、特に大学での勉学をスター

トしたとき、学ぶべきことがあまりに多いことに愕然とするという経験があると思います。過去の蓄積に比べて、自分がなし得ることの可能性の少なさを考えて、学ぶ気をなくしたという経験です。過去の知の蓄積に圧倒されるのです。

しかしどの分野でも、わかっていないことよりもわからないことの方が圧倒的に多い。このことを知ったとき、「よし、頑張っ

てわからないことに挑戦してみよう」とか、「そんな簡単に見えることがわかって

にヒントをもらうことが大切だと主張しているのです。

ここまでは、人々あるいは人類全体にとっての「わかっていないこと」の話ですが、次に一人一人にとって「わかる」「わからない」という問題です。どのよう

にヒントをもらうことが大切だと主張しているのです。この問題は、近年心理学・教育学あるいは認知科学・脳科学で研究が進んでい

ます。この種の研究で、私にとって特に興味深いのは、「人がどのように間違えるか」という問題です。どのように間違えるかについては、二種類の間違え方を分けて考えるべきです。「多くの人が、必ずといってよ

いほど間違えるという法則的な間違い」と「たまたま間違える間違い」です。

して何故人々が間違いやすいかにについての研究が進んでいます。そしてこの種の研究が、近い将来経済学にも応用されることを期待しています。なぜなら昨今の金融危機を生み出したといわれる「金融工学」が、「人々が誤らない」ということを前提とする研究に偏り過ぎたために、その教えるところに間違いが生じたといえるからです。最近「失敗学」を提唱する人たちがいますが、金融工学は、この失敗学の成果を学ぶ必要があります。研究者の中には、自分の研究が素晴らしいことを過度に宣伝しようとして、誤っている可能性について謙虚に語らないために、社会に害を与えることが少なくありません。研究者は、こういう害を発しないために、「わからないこと」を謙虚に語ることが大切

です。話がそれましたが、先ほどの二種類の間違いをもう少し整理します。たとえば「ぼ

うっとしているときに」間違ふことの説明が後者であり、おそらく脳科学の当

面の研究対象です。しかし、かなり一生懸命考えても間違ふのは、別の研究対象で、教育学や心理学の蓄積にもとづいて進めるべき研究です。そしてこの種の研究は、法則性を見出すことが大切



西村 周三 (にしむら しゅうぞう)  
1945年生まれ 京都市出身  
専門分野：経済学  
趣味：クラシック音楽鑑賞



# 創造行為総論

篠原資明



## 創造行為総論とは

「創造行為総論」という名称から、どのような授業を思いえがけばよいのか。なかなか難しいでしょうね。でも、おおよそは推測できるのではないのでしょうか。だって、創造行為が凝縮されたかたちで示されるものといえば、やはり芸術ということになるでしょうから。

芸術について語るには、いろんな語り口があります。ひとつひとつの作品を説明するというやり方が、もともとなじみ深いものかもしれませんし、特定の芸術家の生きざまから迫るといふ手もあるでしょう。ただ、この授業では、芸術について哲学的に語るというやり方をとっています。

だったら、美学ないしは芸術哲学と同じことになるのでは。そういわれるかもしれませんが、ある意味で、確かにそれと異なります。現にほく自身、あなたの専門は、と聞かれると、美学・哲学とか芸術哲学と答えることにしています。ただ、この授業では、創造性ないしは生成の哲学の立場から、芸術および隣接諸領域について語ろうとするのです。

ところで、「生成」という言葉、難しいですか、ね。授業中、この言葉を使うと、ひとりの学生から、「先生、生成って、何ですか」と質問されたことがあります。ぼくは、「先生、先生って何ですか」と聞かれたものと勘違いしてしまっただけで、自分と

は何かを語りつづけたオバカな経験を、つい思い出してしまいます。ほとんどの理解では、創造性も生成も同じことです。どちらか、何か新しい変化をもたらすことにかかわるからです。ただ、芸術に典型的なのは、創造性の極致として、二重生成を生じさせるということですね。それを作りだす人自身も変われば対象も変わる。あるいは、それを受けとる人自身も変われば、対象の感じとり方も変わる。そういった具合に、相互に生成変化を生じさせるあり方を、ぼくは二重生成と呼ぶことにしています。

## 創造性の哲学

ところで、生成ないしは創造性の哲学は、とても大きな問題に触れないわけにはいきません。それは、「われわれはどこから来たのか、われわれは何であるのか、われわれはどこへ行くのか」という問題です。この表現は、NHKの「世界遺産の旅」という番組のタイトルにも使われています。そう、画家ゴーギャンによる大作に付されたタイトルでもあります。この表現は、すでにキリスト教の初期あたりから使われはじめ、有名なところでは、ペトラルカ、パスカル、そして新しくはベルクソンにも見出される問いなのです。

日本でも、そっくりの表現というわけではありませんが、たとえば空海の「生まれ上、無常であるほかありません。わが身の無常を自然の無常に重ね合わせる。そこに自然を友とする深い意味があり、ほかでもない、そこから日本の珠玉の芸術の数々が生みだされたといっても、過言ではないでしょう。

もつとも、存在そのものであるがゆえに、被造物としての存在者と区別される造物主としての神といった考え方は、日本には存在しませんでした。しかし、仏というのは、ある意味で、人をこえた存在であると考えられてきたのも事実です。そのような仏への生成、すなわち成仏を、日本仏教は説くにいたりします。その典型が、空海による即身成仏論であることは、言をまたないでしょう。風雅という、自然を友とする生成と、成仏という、仏への生成とが、深いところをつながっていること。それもまた、創造性の哲学の明かすべき事柄なのです。

し、またそれによって芸術の考え方も左右されます。創造性の哲学の立場から芸術を考察する理由は、そこにあるのです。

## 日本の美学あるいは風雅論

ただ、創造行為総論は、前期の基礎篇と、後期の応用篇とに分かれています。思うところあって、しばらく前から、基礎篇を日本篇とし、応用篇を西洋篇とすることにしています。ほく自身は西洋の哲学と美学を研究して、自分なりの創造性の哲学に立ちいたることになったのですが、ふとしたきっかけから空海以後の日本の思想に入りこむことになりました。そしてそこに見出したのは、たいへんな宝の山だったので、この宝の山から探りあてたものを、若い人たちに少しでも紹介しておきたい、そんな思いから、まず前期を、日本の美学ないしは風雅論に当てることにしました。

通りがいいので、つい「日本の美学」などといってしまうのですが、もちろん、そもそも「美学」という言葉自体が、明治以後の造語ですから、日本古来の「美学」などといういい方は、本来なら不正確といえるかもしれません。美なり芸術なりに相当する語が日本にあったとすれば、それは風雅という言葉でしょう。風雅とは、端的に言って、自然を友とするあり方です。そしてこの場合の自然とは、あくまで、生成変化する自然のことです。生成変化する以



授業風景

この種の創造性の哲学からすれば、芸術は、神の創造を継承するものと見なされるでしょうし、事実、そのように考えられてきたのです。神学を表に出さないにせよ、無を抱えこんだ人間が存在充実へといたる特権的なあり方を芸術に見る立場は、いまなお跡を絶ちません。さきほどの問いにどのような答えを用意できるかによって、哲学のあり方も変わってきます



篠原 資明 (しのはら もとあき)  
 大学院人間・環境学研究所 教授  
 1950年 香川県生まれ  
 専門分野：美学・哲学  
 趣味：音楽、滝めぐり



# スポーツ実習Ⅱ (サッカー)

川本鐘浩

現在の全学共通科目「スポーツ実習」は、京大大学教養部の時代から長く実施されてきた「体育」の授業の後を受け、時間割と場所に苦勞しながらも充実した授業が行われている。それは、授業という形で週に一度はスポーツを楽しみ、心身の健康を維持することがいかに大切かを、実際に指導している教員が一番感じているからである。失礼な言い方ではあるが、概ね最近の京大生にはいろんな意味でのタフネスが欠けている。打たれ弱い。辛抱弱い。明るく人と接することができない。確かに知的能力は上がっているのだが、なかなか独力で何かを成し遂げることができない。

しかし、金曜日の2・3限の農学部グラウンドに集まってくる学生たちには、そんな弱さは微塵も感じない。ひよっとしたらうつぶん晴らし、八つ当たりかもしれないのだけれど、そこまでやらなくてもいいのと思うくらい一生懸命走り回って、疲れたあとという顔をして帰っていく。もちろん礼儀は守らなければならぬけれど、スポーツの楽しさはここにある。そして、サッカーという競技はそれぞれの考えや個

もほとんどがゴールに結びつかない無駄走り。だから精神的にも強くなれる。そのとき仲間が助けてくれる。これが結構ぐつときて、いい友達ができる。自然に人と話ができるようになる。一生懸命やっていると時には接触プレーにもなる。痛みがわかる。初対面どうしでも、「ごめんなさい。」と真っ青な顔をしてたり、「全然平気。」とやせ我慢している若者を見ると、ほんとに爽やかな気持ちになる。中には中学、高校まで部活をやったという学生もいて、ときには「リーガー顔負けのすごいシユートを決めるやつもいる。ボランテアで協力してくれる教員や大学院生の方もいて、みんなには毎回楽しいゲームを満喫してもらっているが、実は指導している方も若さをもたらしている感じがしている。ただ、あまり一生懸命やっているの、ケガはしないだろうか、体調は大丈夫だろうかとはらはらさせられるのが少し大変かもしれない。

さて、スポーツにもたくさんの種目があって、「スポーツ実習」でも、ソフトボール、サッカー、テニス、バレーボール、卓球、バドミントン、バスケットボール、フィットネス、ウォーキング、二軸動作、サイクリングを各曜日、各時間で開講している。そもそも「スポーツ実習」の目的は、



性が身体で表現できる最高の種の目のひとつである。

学問や研究をするためにはスポーツは必要ないと考える方もいらっしゃるが、かつては必修であった「体育」の授業も、「スポーツ実習」になって卒業単位にもならなくなった。そういう理由もあって、現在履修者数は極めて少ない。もちろん面白い、楽しい、必要だと思われる授業は単位や成績とは無関係に履修するのが理想である。しかしながら、現実には学生にはゆとりは無いみたいで、特に2回生向けの授業は敬遠される。そこで、この場を借りてスポーツ実習、特にサッカーの魅力のアピールしたい。とにかくサッカーは走らなくてはならない。走りは健康の基本だから、体力を維持するのに最も大きな効果がある。しか

- ① 身体活動の基盤となる体力の向上を図る。
- ② 楽しく、しかも生涯にわたって続けたいことが可能なレクリエーション的スポーツ種目の技能を身につける。
- ③ スポーツ実習を通して社会的交流技能を養成する。
- ④ 生涯体育の基礎として、スポーツの生活化を図る。

である。その構成として、「スポーツ実習Ⅰ：基礎・応用体育実技」では、自己の技能、健康・体力の現状を知り、適応技術、自分のコンディショニング方法を見つける。また、「スポーツ実習Ⅱ：発展体育実技」では、自分なりの関心領域を見つけ、運動プログラムを「創る」、そしてその技能を磨くことが掲げられている。前期・後期の最初の時間に体育館のメインフロアで予備登録をしていて、大学院生を含む全学生に開放されているので多くの方に履修してもらいたい。

とにかく、週に一度はきつと思うくらい身体を動かさないと、若い肉体と精神は良好に維持できない。文武両道といったところか。その中でも、ここで取り上げたサッカーは、前期は(月)1・2・3、(水)1・2、(木)1、(金)2・3限に開講されているので、関心のある方は気軽にグラウンドか体育館にのぞきに来てほしい。あと、最近では女性でもサッカーを愛する人が多くなったので、新たに女子サッ

カーを企画している。この時代であるから、京大でも女子学生の存在感は年々大きくなってきている。「京大でしこ」の華麗なプレーが楽しみなのもあるが、これからは老若男女を問わず心身を鍛え、充実した人生に備えてほしいという願いもある。それが基礎教育の最も大切なところだろう。

最近では、京大でも再生医療が研究の中心となっているようだが、ひとつ不安なのは、人間が今より長く身体の健康を維持できるようになったときに頭脳、精神を充分なレベルで維持できるのかということである。これがいわゆる「健康寿命」で、これがうまくいかないと介助の必要な老人の数が増加し、若者の負担が増えて社会としてバランスがとれなくなるのは明らかである。それだからこそ健康寿命を少しでも長くできるように、特に若い人にはスポーツに心がけてほしい。それよりも何も、仲間とみんな汗を流すのは最高に気持ちがいいぞ。



川本 鐘浩 (かわもと しょうこう)  
1962年、三重県生まれ  
スポーツ実習Ⅰ・Ⅱ、サッカー担当。  
東京大学大学院にて教育学を専攻。  
専門は学校教育。  
趣味は鉄道旅行、松尾芭蕉研究。



# 旅とアジア 旅行記と

金坂清則 (かなさか きよりの)  
人間・環境学研究所 教授  
1947年富山生まれ大阪で育つ。  
京都大学文学研究科博士課程単位取得退学  
専門は人文地理学。京都大学応援団顧問。

## 狙いと願い

旅という言葉を目にし、耳にして心動かされない人はいまい。ましてや、入学試験に通る、喜びと解放感に包まれている皆さんにとっては、「旅」は何よりもしてみたいことのひとつとしてあるだろう。

ところが、旅への憧れに比べ、旅行記に関心のある人はそれほど多くない。小説を読みたい人に比べれば確実に少ない。文学にあって紀行文学や旅行記は今なおマイナーな存在である。

しかし、旅行記を文学の枠にはめ込むのは間違っている。旅行記は文学の範疇に収まるものではない。

旅行記を読むとは、その基になった旅を読み、旅する人を読み、旅した場所・地域を読み、旅した時代を読むことなのである。だから、旅行記は幾つもの学問分野の研究対象になるし、真に求められるのは学問分野の枠組みを超えた研究なのである。ここに旅行記研究の面白さと将来性がある。

このことを授業での様々な営為を通して示すことによって、受講者に新鮮な驚きを感じてもらいたい。その驚きはこのような研究への関心を生むだけではない。喚起される知的

クルディスタンの旅―の後は、王立地理学協会の女性初の特別会員になるという榮譽を得ている。例外的なことだった。

他方、主として取り上げる旅行記は、その彼女が再び旅先での死も覚悟して行った、日清戦争前後の三年二カ月に及ぶ極東の旅の成果の一つ The Yangtze Valley and Beyond、正確には私が翻訳したこの訳本『中国奥地紀行』(平凡社・東洋文庫)のうちの第二巻である。実質的には彼女の最後の著書である本書は、病と依頼される講演をくり返す生活に区切りをつけ、ロンドンから亡き父の最後の教区ウイトンの隣地に居を移し、全力を傾注して漸く成った大著であり、彼女の類い稀なる旅行家、プログレッシヴな旅行家としての特質が余すところなく出た書物である。その意味で、ゼミの狙いに照らしても最もふさわしい。また、訳書第二巻には、伝道の旅と冒険の旅という、彼女の旅を考える上で見逃せない二種類の旅が含まれている。

## 如何にして単なる輪読を超えるか

本書の魅力は、様々な困難を突破して前人未到のチベット世界に到達した六カ月、七千キロに及んだ旅自体のすごさや、率直・繊細で臨場感に満ちたその描写にある。したがってこのことを味わい楽しむには、旅行記を読むことがやはり基本になる。だが、授業ではただ読むだけではなく、私が訳書を産むに至るために行った知的営みとその果実を開示していくことによって、記述の内容を深く理解し、旅行記を真に読んでいくという方法をとる。

そのために、私がこの仕事のために収集してきた地図その他の各種資料を見せられたり、配布した古地図にバードの旅のルートを示す。

好奇心は大学生生活の様々な局面に適用され得る。学問研究に通底する事柄も具体的に知り得るからである。もちろん、新しい旅を創る上での幾つものヒントも習得できるはずである。

以上がこのゼミの狙いであり、私の願いでもある。ではなぜアジアなのか。この点について約30年前、京都大学で学んだことを糧として世界にはばたいていく皆さんにとって、日本を含むアジアへの理解と関心を深めることがいよいよ求められる、そのような時代だからである。

とりわけこの授業で取り上げる十九世紀のアジアは、二十世紀や今日、あるいは未来のアジアや世界の理解にさえも不可欠である。そして、それを臨場感・実感を伴う形で理解するには、実は良質の旅行記が何よりなのである。

## 素材の魅力と重要性

次に、このような目的を達成するために扱う素材の魅力と重要性についてふれておこう。

まず、取り上げる旅人は一八三一年に牧師の長女として英国北部バラブリッジに生まれ、一九〇四年にエディンバラで七二年の生涯を終えたイザベラ・バード。二十二歳の時に病氣回復の手段として医者に勧められて始めた海外の旅を、アジアに焦点を置かれた七十七歳まで続け、南アメリカと南極を除く全大陸を旅した史上屈指の女性旅行家である(病弱で小柄な(一四九cm)女性だった)。

その旅は、五十五歳の時、結婚五周年を目前に未亡人になって以後、いよいよ激しさを増し、激動のアジアに展開する。そしてその前半の旅―レサーチベット・ペルシャ・

復原するという作業なども興味していく。ディスカッションも交えながら。

だが、このことに関わってもう一つ行いたいことがある。それは、私が二〇〇五年に国立スコットランド図書館、二〇〇八年にイングリッド北部のファウンテンズ・ホール(世界遺産)とスコットランドのダンディー大学で JAPAN-DUKISO の記念事業の一つとして延べ四カ月にわたって開催していただいた写真展 In the Footsteps of Isabella Bird : Adventures in Twin Time Travel の成果と反響の一端を紹介することによって、前述した旅行記を読み、研究する面白さと掘りかき皆さんに伝えることである。

半世紀近くに及ぶバードの世界の今日の姿を、二十年かけて撮ってきた写真は、Twin time travel の産物であるが、旅行記に描かれた旅の時空を自らの旅の時空に、後者に力点を置いて重ね合わせる旅という意味で、この和製英語を私が編み出したのは、この『中国奥地紀行』翻訳のための旅においてであった。そしてまた揚子江流域の旅は、彼女にとって新しい表現媒体として写真を駆使した唯一の旅でもあった。



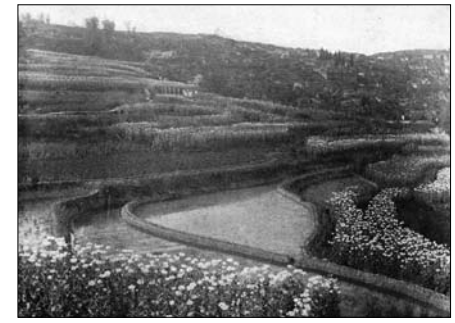
写真展示スター



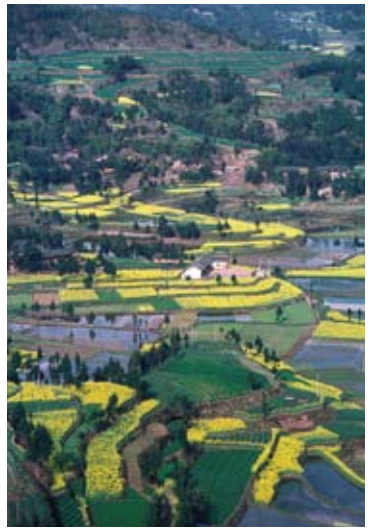
写真展の報道(原寸は34×37cm) -ヨークシャーポスター



スウォモ最終到達地点 校磨土司の拠点の今昔  
撮影:左 バード(1896.5)  
右 金坂(2001.8)



四川盆地縁辺の作物変化 -ケシからナタネへ-  
撮影:左 バード(1896.3)  
右 金坂(2003.3)



授業の風景と素材





# 「進化とは何か？」

本年度ポケットゼミ「進化とは何か？」を開講するにあたり

2009年は、チャールズ・ダーウインの生誕200年であるとともに、「種の起源」の出版150年に当たる。今年のテーマとして、「進化とは何か？」を選んだ理由はここにあり。本ゼミでは、知識の提供だけを一方的に行うことはしない。重要な点は、知識がいかにすれば構成できるかを自得することにある。学習すべき内容は十分に気を取られていて、知識の洪水に埋没するばかりである。そうではなく、学習方法に視点を移すことによって、より効率的に学習内容を修得できるとともに、未知の領域にも果敢に挑戦できる可能性が開かれるのである。しかも、こうした転換こそ、進化の本質に他ならないのである。

単純に、進化を外面的な変容にばかり求めるのではなく、私たちが内面的な認識過程にも同等の変容を求めることによって、進化の本質に加えて認識、さらには生命の本質をも読み解けることを実感できるよう工夫を凝らしたい。自分で考える力を伸ばしたい、教科書の内容には飽き飽きした、やる気のある雰囲気浸りたい、そんな欲求に答えるべく、文系・理系を問わずに本ゼミを開講する。

本ゼミの特徴は、前期にさまざまな話題を提供しながら議論をすすめ、秋には同一テーマで国際会議を開催し、その会議への参加（任意）を通して、学問の本質を実感できることを目指している。授業構成は、以下に挙げた過去2回の内容を参考にしていただきたい。2007年は「生命とは何か?」、2008年は「創造性とは何か?」というテーマであった。受講学生の感想も掲載してある。絶えず変化のある形態を目指して、他部局の教員による話題提供も随時行いたい。また、学生同士

自覚することが重要である。つまり、メタ認識によって、認識の構えを「意識」および「無意識」の両側面から捉えていくことが重要である。環境や世界の認識とは、そうした認識の構えに応じて創発するものなのである。そのために、唯一絶対の世界認識などは存在しない。環境・世界の在りようは、あらゆる認識の統合によってのみ、近似的に捉えられているに過ぎない。

## 客観的知識と主観的体験の統合こそ、本場の「知識」

先に述べた意識と無意識を異なる表現を用いるならば、認識するという方法には2つの側面があると言える。1つは、皆さんもよく熟知している客観的な認識である。これは、見ている対象とは独立に観測者があることを前提としている。その独立性故に、私たちは普遍性について議論できると考えている。自然科学は、こうした客観的な世界観を緻密に体系化してきた学問であることは、言うまでもない。いま1つの方法が、主観的かつ体験的な認識である。対象そのものになりきることによって、その本質を捉えようとする方法である。武術・芸術などでは、書物の客観的知識とは別に、失敗と成功を繰り返すことによって、熟知していくということはよく知られている。

前者は、西洋的であると言われる。後者は東洋的であると言われる。集合的無意識を発見した心理学者カール・グスタフ・ユングは、前者を外向タイプ、後者を内向タイプと呼んだ。創造的学問を探求するということは、実はこの2つの方法を統合することには他ならない。そして、生命の本質は、両者の循環過程「すなわち、「自己・非自己循環過程」として、捉えることが可能となる。これは、従来までの、要素

の意見交換、意見発表の場も設け、このセミナーを通して、自己意識の変革を実感できるような計画したい。

■京都大学2007年度全学共通セミナー  
講義ノート「生命とは何か?」  
<http://www.ocw.kyoto-u.ac.jp/yukawa-institute-for-theoretical-physics/jp/what-is-life>

■京都大学2008年度全学共通セミナー  
講義ノート「創造性とは何か?」  
<http://www.ocw.kyoto-u.ac.jp/yukawa-institute-for-theoretical-physics/jp/what-is-the-nature-of-creativity>

## 学問は目を曇らせる

これは江戸時代の哲学者、三浦梅園(みうらばいえん)の名著「玄語」に主張されている言葉である。みなさんは、その意味が理解できるだろうか。

確かにみなさんは、環境や世界を十分に認識しているつもりである。しかし、環境のごく一部分しか認識していないという事実を認識しているとはいえない。学問が発展しても、このジレンマが解消するわけではなく、ますます私たちが自身の不完全な認識が精密化細分化していくに過ぎない。こうした現実を無視して、既成科学の成果を無批判に受け入れるだけでは、次世代に継承すべき自然や社会の真理・本質を捉えられなくなり、自然や社会それ自体をも維持できないに違いない。地球温暖化を取り巻く「不都合な真実」は、その典型例の1つに過ぎない。ペルリンの壁崩壊やソ連邦崩壊に象徴されるように、社会主義世界にわたって競争原理に基づく資本主義世界が台頭してきた。ところが、その資本主

還元論による物質への還元だけでは、生物と無生物の根本的相異を捉えることができなかったという反省を踏まえた、相補的なアプローチなのである。

世界の禪者と言われる鈴木大拙は、客観的知識ばかりではなく主観的体験の必要性を力説した。禪がことごとく論理を嫌うのは、自然は論理だけでは語り尽くせないという現実を体得することにあるからに他ならない。かくいう私も既成の学問体系を単に受動的に学ぶだけでは、その知識の脆弱さ故に、人生を生き抜くに足る「知恵」は身につかないことを痛感した。ポケットゼミを提供するのは、私がどのように、自分の病に気づき、どのように治療へのゆつくりした歩みをはじめ、どのような学問を創造しようとしているか、具体例を通してみなさんに体得して欲しいからである。実は、病気の発症過程もそして治療過程も同一原理の異なる展開に過ぎない。その基本原理は、「進化」を導く原理でもある。ユングは言う。人は己を頼りにして生きねばならぬと。頼りにすべき己をいかにして獲得することができるか。私たちに課せられた課題は尽きることにはない。



2007年6月19日撮影、「生命とは何か?」の参加学生、基礎物理学研究所会議室にて

※今年度「文系・生命科学系向け現代物理学」を開講します。



▲2007年10月15日～20日に開催した国際シンポジウムのポスターでポケットゼミの学生も数名参加した。

義世界はいまや地球規模の経済危機に瀕している。歴史学者アーノルド・トインビーが指摘しているとおり、成長する文明がたどる発展過程それ自体が、崩壊の危機を招きかねないのである。目先の出来事に振り回されるのではなく、その根底に潜む基本原理の解明が今こそ期待されている。

## 本ポケットゼミの目標

これまでの学校教育のように、既存の客観的な学問体系を一方的に伝えることによって、対象認識を目指すことはしない。そうではなく、1)どのようにして新しい学問体系が構成されていくのかに関し、その醍醐味を各自が主観的に追体験できるようにする。そして、2)この主観的プロセスをいかにすれば、客観的に認識できるようにするか―いわゆる「認識の認識」、すなわちメタ認識―を試みる。それによって、3)どのようにすれば未知なる問題を発見でき、その問題解決に向けた取り組みができるようになるかを学習する。これが「学習方法を学ぶ」ことである。残念ながら、この能力は生まれながらに備わった生得的能力ではなく、後天的に学習しなければ身につかない能力である。そのためにこそ、最高学府で身につけるべき基本的能力といえる。

メタ認識とは、環境認識の特徴やはたらしを認識することである。その際には、認識には「意識的」認識と「無意識的」認識があることを

## 参考文献

- M. Murase "The Dynamics of Cellular Motility" John Wiley & Sons (1992)  
<http://hdl.handle.net/2433/49123>
- 村瀬 雅俊『歴史としての生命—自己・非自己循環理論の構築—』 京都大学学術出版会 (2000)  
<http://hdl.handle.net/2433/49765>
- 村瀬 雅俊「こころの老化としての「分裂病」—創造性と破壊性の起源と進化—」『講座・生命 Vol. 5』 河合出版 230-268 (2001)  
<http://hdl.handle.net/2433/48889>
- 村瀬 雅俊「進化ダイナミクスにおける自己・非自己循環原理の探求—構成的認識の理論と実践—」国際高等研究所報告書 0820, 241-267 (2008)  
<http://hdl.handle.net/2433/49154>
- M. Murase "Endo-exo circulation as a paradigm of life: towards a new synthesis of Eastern philosophy and Western science" In: What is Life? The Next 100 Years of Yukawa's Dream (eds. Masatoshi Murase and Ichiro Tsuda), Progress of Theoretical Physics Supplement No.173, 1-10 (2008)  
<http://hdl.handle.net/2433/67886>



「ポケットゼミ」食の未来戦略を考える」は、農学研究科教授の伏木亨と農学研究科寄附講座「味の素」食の未来戦略講座」の野中雅彦准教授、山崎英恵助教、伊藤弘顕助教の4人が受講学生とともに、日本の食の未来に向けて食の問題の現状と未来を科学的に検証し議論しようとしたものです。昨年度に開講しましたが、予想以上の好評に味をしめ、本年も昨年と同様のスタイルで開講します。

現代日本の食は多くの面で深刻な問題をかかえています。食の欧米化、食文化の伝統の喪失感、孤食の増加による子供の食嗜好の変化、食の偽装表示問題、遺伝子操作した作物の安全性、風評被害、食料自給率の低迷、数え上げればきりがありません。しかも、いずれの問題も相互に関連する根深い背景があり、解決は容易ではありません。

しかし、そんなことで暗くなつてはいけない、とゼミの教員たちは考えました。食べることが本来は、おいしくて、楽しくて、生きる力をくれて、さまざまな人との出合いを演出してくれる、そして、生きることの喜びをも与えてくれるもののはずです。それを取り戻すためにはどうすればいいか。どこが、難しいのか。その問題はどこから来ているのか。解決策はないのか。深刻にばかりならず、いろいろな視点から、冷静に解決の道を考えようと

今年もフレッシュな学生と新たな意見交換ができることを期待しています。前回のトピックスの一つとして、食の伝統に関する時間には、西陣の老舗料亭「萬重」の若主人田村圭吾さんにおいでいただき、実際に昆布と鰹から料亭のダシをひいてもらいました。ご主人のサービスで京都のだし巻きタマゴも巻いていただきました。その間に料理の歴史はもちろん、修行中のこと、料理の世界の裏表、京料理の現状、ダシのおいしさ、料理の勘どころ、野菜の見分けと仕入れ、などなど、他では聞けないリアルなお話をいっぱい聞かせてもらいました。

修行を積んだプロの手で作られた吸い物とだし巻きのあまりの旨さに一同は驚きました。料金の高い京料理のお店に人々が通う理由の一つを体験したわけです。おいしいダシを実際に味わったことは、明らかに「教養」を深めたと教員も学生も実感しました。今年度もポケットゼミの授業の一つとして行う予定です。

余談ながら、この経験は、平成20年12月にカンフォーラで2日間にわたって行われた「京料理のダシの味わいを京大生に味わってもらおうイベント」に発展しました。教員グループは同じ驚きをもっと多くの京大生に体験してもらいたかったのです。京大生200人の募集枠はたちまち埋まりました。もちろん、ポケットゼミの時と同様に大好評でした。7人でも



「本物のダシを味わうことは教養である」2008年12月カンフォーラにて料亭のダシ体験の様子

するものです。

どの時間も、最初に教員が20分程度の話題提供をします。できる限り客観的な事実を的を絞って紹介することに努めています。後は、学生も教員も区別無く自由なディスカッションを楽しみたいと思います。関連の情報があれば、議論の中で随時紹介することもあります。

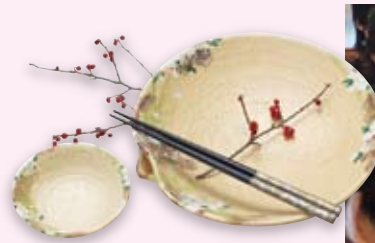
担当の伏木は人間栄養学、食嗜好、味覚、エネルギー代謝の研究者。野中は食品企業の開発担当を永年勤めた食品のプロです。山崎は米国のエール大学で糖尿病と運動に関わる生命科学の研究を行ってきました。伊藤は農作物の先端育種技術を専門とし、農業や農学に詳しい若手教員です。

それぞれが専門以外にも幅広い経験を持ち、栄養学・動物行動科学・食行動に関わる脳科学・農業技術・マーケティング・食品製造工場・食品科学・育種学・生理学・流通・食の法規制・コンビニやマーケットの裏事情・農業の現状・農家の生活などに通じる豊かな経験を持っています。年齢構成も50代、40代、30代、20代とバランスも申し分ありません。性格も悪くはありません。

昨年は、7名の新入生をポケットゼミに迎え「食料自給率とは何か」から始めて「食のおいしさとは」「ダイエット指向とその未来」「サプリメントの時代」「災害と食」「介護食の現状と未来」「食の伝統の現状」「コンビニ」など、さまざまな議論を行いました。

200人でも人間の舌の応答は同じです。たった1杯のプロの吸い物が、食に対する意識を変えてくれたとアンケートではかなりの数の学生が述懐しています。これもポケットゼミの結果と同様でした。

このポケットゼミは、巷に溢れている食に関わる問題の数々を、1つ1つ、じっくりと腰を据えて見直してみようとするものです。さまざまな角度から冷静に柔軟に議論してみたい。考えるだけではなく、いわゆるコンビニの味も実際に体験したい。食料自給率のシミュレーションもやってみたい。そこから何を発見するかは、学生諸君の自由です。わずか90分程度の議論ではその一部しか捕まえないことかもしれませんが、そこからの展開は各自にお任せしています。教員も毎回、発見の連続でした。学び考えることを楽しむ助けになれば、このゼミは成功だと教員は考えています。



伏木 亨 (ふしき とおる)

農学研究科教授  
昭和28年生まれ  
滋賀県出身  
専門は栄養化学

おいしさとはなにかに興味を持ち、ビール、清酒、ワインはもとより、吸い物のだしや油脂のおいしさなどを科学的に解明しようと考えています。



# サークル紹介

Let's enjoy life!!

学生生活の大きな柱のひとつに、クラブ・サークル活動があります。京都大学には公認団体だけで、文化系が約100団体、体育系が約90団体もあります。すでにそれぞれの団体で活躍中の人も多いと思いますが、所属団体以外の活動は意外と知らないもの。ここで紹介する情報をきっかけに興味と交流を深め、活躍の輪を広げていただければ幸いです。

## Digi\*Photo!

京都大学デジタル写真サークル Digi\*Photo! では、写真をホームページ上で公開したり、プリンターで印刷したり、パソコンで加工したりして、デジタル写真を楽しんでいます。一昨年、京都大学の公認サークルとなり、今年で6年目の活動に入った現在も、新しい展示方法を考えたり、新しい企画を立ち上げたりと自由に活動しています。

基本的な活動は、毎週火曜日に行われるミーティングです。写真展の準備や、サークル内コンテスト『今週の一枚』、写真展の情報交換、写真技術の向上のための勉強会などが行われます。特に、『今週の一枚』では、他人の作品を見る機会や、写真を撮る機会が増え、部員の良い刺激になっています。『今週の一枚』に選ばれた作品は、Digi\*Photo! のホームページで見ることができます。

その他の活動としては、撮影会や夏休み合宿、NF(京都大学11月祭)における写真展示があります。

最後になりましたが、Digi\*Photo! は新入部員を常時募集して

おります。あなたも私たちと一緒に写真を楽しんでみませんか？初心者・上回生大歓迎です！興味をもたれた方は、一度ホームページをご覧ください。



<http://digiphoto.ifdef.jp/>

## ギタークラブ

きただけ弾くことができます。それに、共用のギターがあるのでギターを持っていない初心者の方でも安心です。実際、現在の部員の多くは大学に入ってからギターを始めています。そしてみんなそれぞれにギターを楽しんでいます。

キャンパスライフの彩りに、クラシックギターはいかがですか？興味のある方は是非、吉田南キャンパス南、吉田寮付近にある私たちのボックスへお越しください。



<http://kugc.s55.xrea.com/>

## 新入生へのメッセージ

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございませう。今回はみなさんの大学生活がよりよいものになるよう、僕からいくつかアドバイスをしたいと思えます。

一つ目は、さまざまな分野の授業を取ってみるということです。全学共通科目ではいろんな分野の授業があります。僕は歴史学を学びたいと思ひ文学部に入ったのですが、一回生のときには法学や経済学、数学などの授業をとりました。そうすることでほんの少しですが物事に対する違った見方を知ることができた気がします。(とはいっても数学はさっぱりわかりませんが、やめてしまいました。でも自分の向き不向きがわかってよかったです)みなさんもぜひひとつの分野に偏らずさまざまな授業をとってみてください。

二つ目は、何か新しいことを始めてみるということです。サークルでもアルバイトでも資格取得でも何でもいいので、新しいことに取り組むには今が絶好のチャンスだと思います。僕も大学に入ってからサークルでマジックを始めたのですが、そこで11月祭に向けて夜遅くまでみんなで練習したり、幼稚園や老人

ホームでマジックを披露して喜んでもらうといったことは大学生の今しかできない貴重な経験だと思えます。みなさんも大学生というこの自由な時期に、何か今しかできないことに取り組んでみてください。

最後は、京都という街を楽しむということです。ご存知のとおり京都は千年以上の歴史を持っていて、数え切れないほどのお寺や神社をはじめとする見所があります。その京都でみなさんは少なくとも4年は学ぶのですから、ほとんど何も見ずに終わってしまうのはもったいなさすぎます。少しでも時間があれば京都のいろいろなところを巡ってみてください。また特に遠くから京都にやってきた人は、少し足を伸ばせば大阪や奈良といった街もあります。ぜひ関西を一杯楽しんでほしいと思います。

大学生活は長いようで実はほんのわずかな時間しかないと思います。僕のアドバイスがみなさんの参考になるかどうかわかりませんが、ぜひこれからの大学生活を思いっきり楽しんでください。

文学部 歴史基礎文化学系西南アジア史専修 3回生

寺原裕起



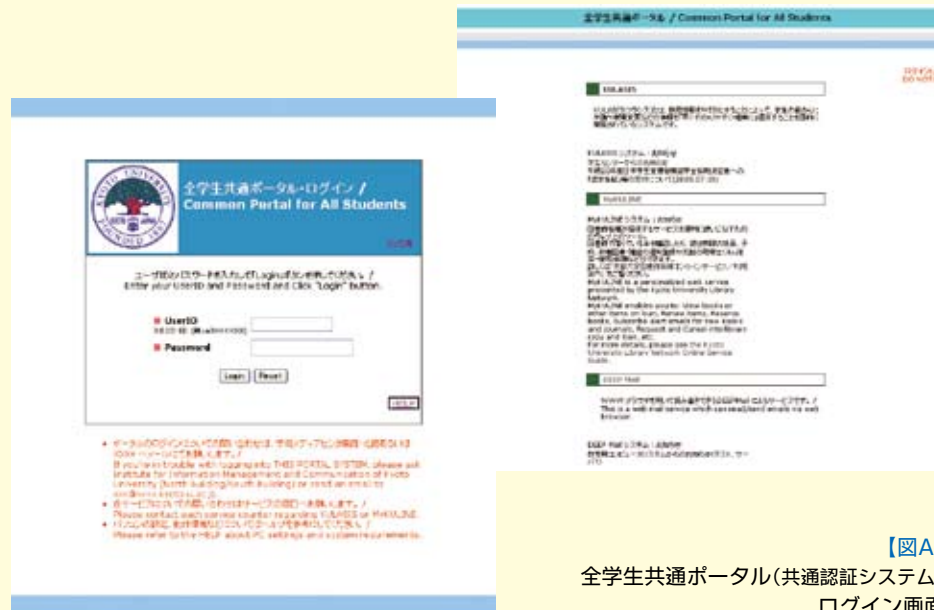
## KULASISへのログインについて 新入生のみなさんへ

今年度新入生より、KULASISへのログインは「全学生共通ポータル(共通認証システム)」(<http://student.iimc.kyoto-u.ac.jp>)【図A】で行います。このシステムでは、KULASISを始めMyKULINE(蔵書検索)・DeepMailが利用できます。また、ログインには情報環境機構交付の教育用コンピュータシステム利用コード(ECS-ID)が必要であり、取得するには教育用コンピュータシステム利用コード交付講習会を受講しなければなりません。講習会の日程については、高等教育研究開発推進機構ホームページ(<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp>)の「新入生への案内」で確認してください。

ECS-IDを取得することにより、学内での様々なコンピュータサービスを利用できます。京都大学では教育用コンピュータシステムを使った授業が開講しています。ECS-IDを取得していないと授業でも支障をきたすことになりますので、注意してください。

4月・5月は新入生のみなさんにとって、ポケット・ゼミ予備登録や履修登録などKULASISを利用する機会が増えますので、必ずECS-IDを取得してください。

なお、在学生でKULASIS専用パスワードをお持ちの場合は、引き続き従来のKULASISログインページ(<http://www.k.kyoto-u.ac.jp>)からアクセス可能です。



【図A】  
全学生共通ポータル(共通認証システム)  
ログイン画面

## KULASIS第2期全学展開がスタートします。



前期より文学部・理学部・医学部(医学科・人間健康科学科)・経済学研究科・工学研究科・エネルギー科学研究科・情報学研究科・地球環境学堂・経営管理大学院の10部局でKULASISがスタートします。これらの部局ページでは、「お知らせ」機能(休講情報、授業変更、レポート情報)を中心とした教務情報を確認することができます。また授業サポートとして、教員からの授業連絡メールの受信や授業資料のダウンロードが可能になります。

全学展開も第2期をむかえたことで、KULASISは全学共通科目、10学部(全ての学部)、7研究科(上記の研究科と教育学研究科)で運用していることとなります。KULASISの導入部局が増えるとみなさんが所属している学部の情報のみならず、他学部・大学院の情報もKULASISで確認できることになり、一層便利になります。

また、KULASIS全学展開ワーキング・グループでは、学部版「履修登録」・「成績確認」の機能開発にも着手しています。工学部を先行部局として業務分析・システム修正を行い、今年度中のスタートを目指しています。ただし、各部局で今後KULASISによる「履修登録」・「成績確認」を利用するかどうかは、各部局の希望によります。

全学共通科目やKULASISにご意見等ありましたら、高等教育研究開発推進機構ホームページの意見箱をご利用ください。  
<http://www.z.k.kyoto-u.ac.jp/>



春を迎え、心も浮き立つ季節となった。「萬物、發ル候」(大言海)からというが、「はる」のは芽(発芽)ばかりでなく、学を志して新たに門をくぐるもの思いもまたそうであろう。期待に胸ふくらみ、意欲が自然と湧き起る。Well begun is half done. というが、事の成否は、今このときであり！ 哲学、数学といった古典的科目から、見慣れぬタイトルの科目に至るまで、学問の「今」を反映した多彩な授業に一つでも多く顔を出してみてくださいね。

さて、そうは言ってみたものの、空しく齢を重ねた老残の身には、近頃めっぽう、始まりではなく終わりのほうが気になってしかたがない。All's well that ends well. といけばいいが、果たして、この身の最期は如何なるものとなるのやら。何年やっても最後の授業の締めくりすらままならぬことを思えば、研究など覚束ない限りだ。ついつい、授業では老いを楯に、要らぬ老婆心を發揮する。「人間は、時の中に住まうものであつて…」Art is long, life is short. 「少年老イヤスク…」Time flies. 「邯鄲」炊

の…「皆さんはまだ若いから、峠の向こうにいる死神の顔はまだ見えんのですよ。私の年の年になると…」

ただ、そう言いながら、教師の目は笑っている。古代ローマのことわざに「教えることによって学ぶ」というのがあるそうだ。私は「教えることによって若返る」と言いたい。毎年、4月に新入生を迎えるたびに、私は一歳年老いているはずだが、気分は一年若返ったつもりである。目の前の学生が、ついこの前の授業の時より一つ若くなったのだから！ それに、私は今、子育ての真つ最中で、わが子とともに幼稚園、小学校にまた入った気である。ならば「教えることによって人生をやり直す」とでもなるか。でも、あまり、自分の夢を押し付けられないように気をつけています！

本学が掲げる「学術的教養」という言葉からは、何か小難しい響きを感じるが、実際は今の成長過程での自分のありようを見据えながら忌憚なく学ぶということにすぎない。「学問」を知的関心のみで一人歩きさせるのではなく、それを生み出し、生かす

# 「老いも若きも 学術的教養!？」

桂山 康司

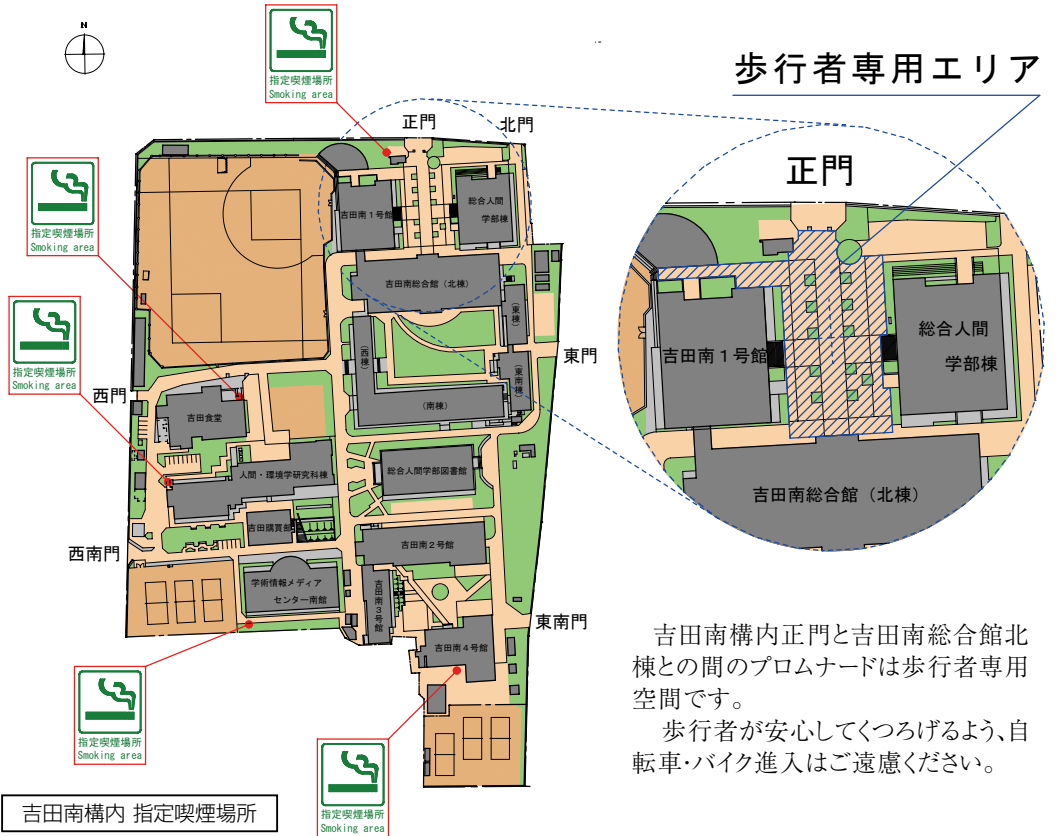


桂山 康司(かつらやま こうじ)  
昭和34年3月8日 大阪府生まれ  
高等教育研究開発推進センター  
准教授  
専門分野：英文学(英詩)  
趣 味：謡曲、だんじり祭

べき主体である「人間」にしっかりと根付かせたものとする—そのための幅広い人間的関心が教養というものだ。(因みに、英語ではcultureというが、もとは「魂の耕作」という比喩表現で、そこから「精神の」涵養、鍛錬)「鍛錬の結果得られたものとしての」教養となった。私も「老いた」身として、自分にとっての学問を問い続け、皆さんは「若々しい」感性を生かし、学問との対話(時に「老いた」教員との会話)を通じて大いに魂を悩ませてください。教室で(でなければ研究室で!)出会う日を楽しみにしています。

最後に、テレソティウスの芝居(「自虐者」)に登場する、これまた、おせっかい老人の名セリフをご賞味あれ。  
horo suni, humani nihiti a ne alienum puto.  
「いや、わたし人間ですからな。人間にかかわることなら何でも、わたしにとって無縁とは思えんですよ。」(柳沼重剛訳)

## 自転車をご利用の方へのお願い



## 指定場所以外では 禁煙です

受動喫煙防止のため、昨年4月より吉田キャンパスは指定喫煙場所以外では禁煙となりました。喫煙される方は指定喫煙場所をお願いします。





# 表紙を飾るスナップ写真大募集!!

『共通教育通信』では、みなさんのキャンパス生活シーンの写真を用いて毎号の表紙をデザインしています。日常の何気ない風景、「面白い!」と感じたもの、友達とのスナップなど題材は問いません。みなさんがデジタルカメラや携帯電話で撮影した写真を下記のアドレスまでお送りください。

■写真には学部、回生、氏名、コメントを添えてください。

■著作権や肖像権の問題などにより掲載できない場合があります。著作権の確認、人物を撮影する場合は掲載の承諾を得てからお送りください。

送り先:

京都大学共通教育推進課

e-mail : 730tusin@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

「共通教育通信」についてのご意見・ご感想も、こちらのアドレスにお送りください。



## 今号の表紙写真紹介

1. 6. 新入生ガイダンス会場前にて
2. 7. 吉田南サークルフェスティバルにて
3. 4. 第50回京都大学11月祭にて
5. スポーツ実習ガイダンスにて

# 「学生による授業紹介」原稿募集!!

みなさんが受講されている授業を紹介してください。授業での貴重な経験・驚いたこと、ユニークな先生の紹介など500字程度(科目名、担当教員名も含めて)でお願いします。

■学部、回生、氏名を本文とは別に明記してください。ただし、掲載時には学部、回生のみを掲載し、氏名は掲載しません。

■掲載に際して、編集部にて表現の一部を削除・訂正する場合があります。

送り先:

京都大学共通教育推進課

e-mail : 730tusin@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp